

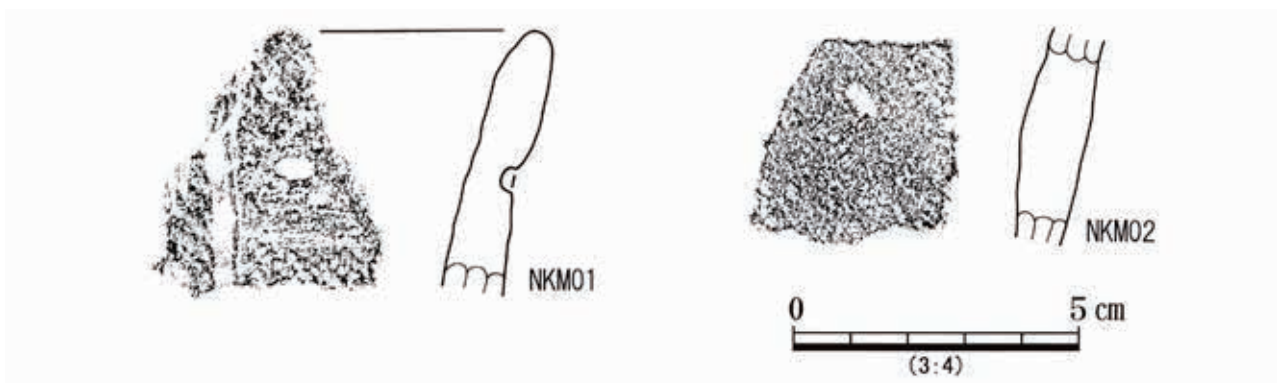
山梨県御坂中丸遺跡における縄文時代早期の植物圧痕

中山誠二（山梨県立博物館）

1 遺跡の概要と分析資料

御坂中丸遺跡は、山梨県笛吹市御坂町上黒駒地内に所在し、御坂山塊から流れる金川右岸の緩斜面上に立地する。発掘調査では、縄文時代中期を中心とする遺物包含層や集石遺構、土坑、ピットなどが多数検出された。遺物には縄文時代早期の在来型土器がおおく含まれている。（山梨県教育委員会 2011）。

今回分析を行った資料は、遺跡から出土した縄文時代早期の土器2点である。これらの土器は、いずれも1号集石土坑周辺から出土したもので、押型文系土器、条痕文系土器、野島式併行する古屋敷遺跡第IV群（富士吉田市）などが主体であることから、縄文時代早期後半に位置づけられている。



第1図 御坂中丸遺跡出土植物圧痕土器

2 分析手法

本調査では、縄文土器の表面に残された圧痕の凹部にシリコン樹脂を流し込んで型取りし、そのレプリカを走査電子顕微鏡（SEM）で観察する「レプリカ・セム法」と呼ばれる手法を用いる。

作業は、①圧痕をもつ土器試料の選定、②土器の洗浄、③資料化のため写真撮影、④圧痕部分の実体顕微鏡での観察、⑤圧痕部分に離型剤を塗布し、シリコン樹脂の初期充填、⑥走査電子顕微鏡用の試料台に増粘剤を加えたシリコンを載せ、初期充填を行った圧痕部分にかぶせ転写、⑦これを乾燥させ、圧痕レプリカを土器から離脱、⑧走査電子顕微鏡（日本FEI製 Quanta600）を用いて転写したレプリカ試料の表面観察、⑨現生試料との比較による植物の同定という手順で実施した。

なお、離型剤にはアクリル樹脂（パラロイドB-72）をアセトンで薄めた5%溶液を用い、印象剤には東芝シリコン TSE350 を使用した。

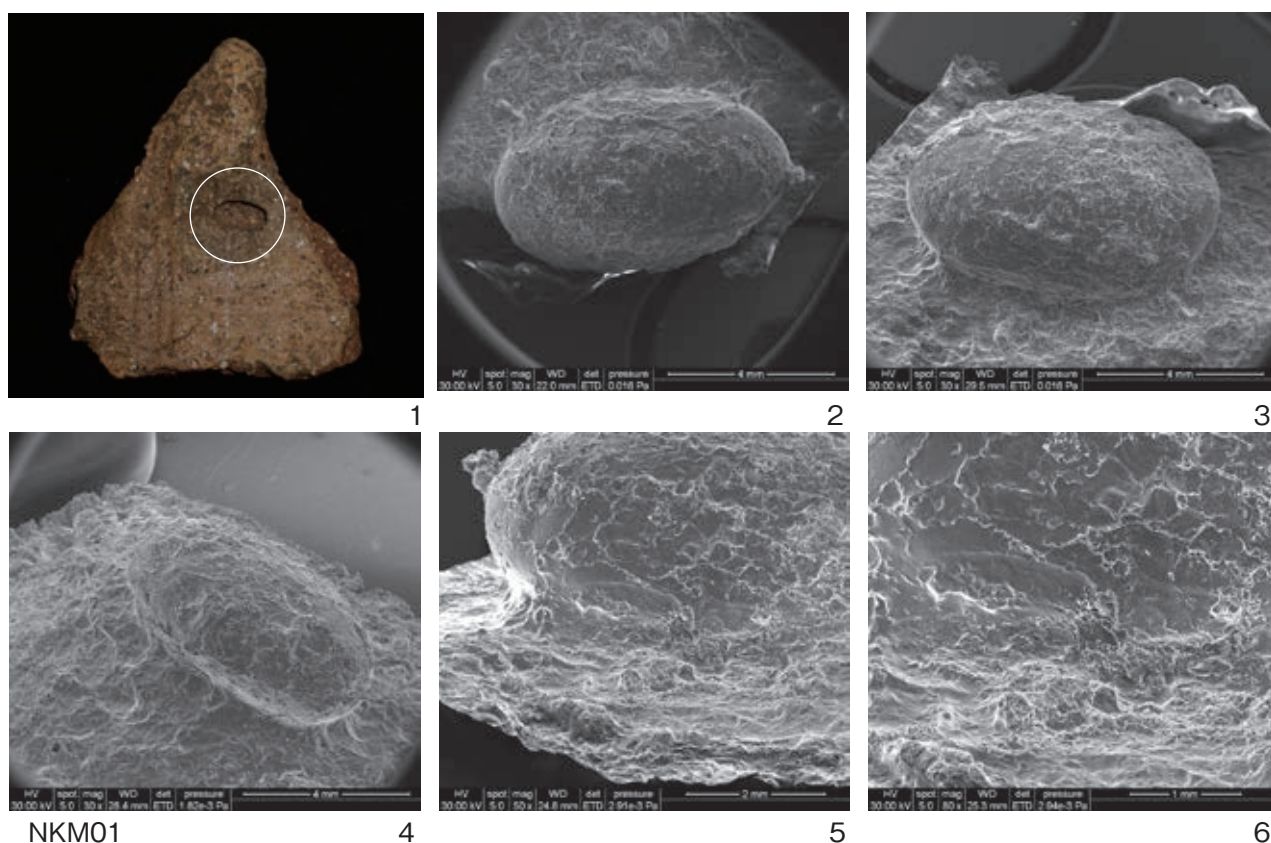
3 分析結果

NKMO1（第2図1～6）

本試料は、長さ7.6mm、幅4.8mm、厚さ3.4mmの扁平楕円形の植物種子圧痕である。種子のほぼ中央部分に長さ2.9mm、幅0.7mmの長楕円形の臍縁に囲まれた臍が確認される。臍は全体の3分の2程度が残存し、臍中央部には部分的ではあるが臍溝が長軸方向に認められ、露出型の臍を持つマメであることがわかる。全体的特徴や臍の形状からダイズ属 *Glycine* sp. であることは疑いないが、大きさの点から野生のツルマメ *Glycine max* subsp. *soja* であると判断した。

NKMO2

長さ7.25mm、幅4.3mmの圧痕であるが、植物以外の圧痕と考えられ、原型は不明である。



1 : 土器写真 2～6 : 圧痕SEM画像
第2図 御坂中丸遺跡のダイズ属圧痕

4 小結

縄文時代のダイズ属は、レプリカ法の圧痕研究の進展によって近年その存在が注目され、縄文時代中期中葉以降には野生種よりも明らかに大型化した栽培種と考えられる種実が増加し、ダイズが栽培化されている事実が明らかになってきている（中山 2009）。しかし、ダイズ属の利用の開始については 長野県山の神遺跡（縄文時代早期中葉；中沢 2009）と山梨県天神遺跡（縄文時代前期後葉；中山他 2009）の事例に限定され、国内においては極めて発見例が少ない。

今回、中丸遺跡から出土した縄文土器早期の圧痕は、両遺跡の中間に位置する時期に比定され、中部高地において野生ダイズのマメの利用の開始期と継続性を知る上で極めて貴重な情報を提示したといえる。

なお、本稿は御坂中丸遺跡の報告書に掲載した報告文を修正したものである（中山 2011）。

引用文献

- 中沢道彦 2009「縄文農耕論をめぐって－栽培種植物種子の検証を中心に－」『弥生時代の考古学 5 食料獲得と生産』pp.228-246 同成社
- 中山誠二 2009「縄文時代のダイズ属の利用と栽培に関する植物考古学的研究」『古代文化』61-3 pp.40-59 古代学協会
- 中山誠二 2011「御坂中丸遺跡の植物圧痕の同定」『御坂中丸遺跡－山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書』pp.59-60 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 278 集
- 中山誠二・長沢宏昌・保坂康夫・野代幸和 2009「レプリカ・セム法による圧痕土器の分析 3 －山梨県天神遺跡、酒呑場遺跡－」『山梨県立博物館研究紀要』3 pp.1-22 山梨県立博物館
- 山梨県教育委員会他 2011『御坂中丸遺跡－山梨リニア実験線建設に伴う発掘調査報告書』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第 278 集